

聖書:ルカの福音書12章1～12節

説教:聖霊を冒瀆する者

はじめに

第一ヨハネ1章9節に、「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます」とあって、主イエスキリストの十字架の血潮はどんな罪でも赦さしてくださることを私たちは強く信じています。

ところがぎょうの10節には「聖霊を冒瀆する者は赦されません」とあります。すべての罪が赦されるはずなのに、赦されない罪があると聞いて急に不安になります。そもそも聖霊を冒瀆するとはどういうことなのか。なぜ聖霊を冒瀆する者は赦されないとされるのか。いっけん厳しいと思えるイエスのことばのなかに、どのような恵みが隠されているのか、ともに考えてまいります。

1 偽善には気をつけなさい

1) だれが一番偉いか論じ合っていた

1節。「そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。『パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。』」

イエスが弟子たちに「偽善には気をつけなさい」と警告されたのは、人が大勢集まるようになったときでした。そこになんらかのつながりがあるのか、これだけではわかりません。

そこで、このときの弟子たちの霊的な状態がどうのものであったのか、そこに目を留めます。マルコ9章33, 34節。「イエスは家に入ってから、弟子たちにお尋ねになった。『来る途中、何を論じ合っていたのですか。』彼らは黙っていた。来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたからである。」

会社で働いていると、次の人事異動でだれが昇進するか、そういうことが気になります。弟子たちも同じだった。もちろん最初からそうだったのでありません。ペテロがすべてを捨ててイエスについていくことを決心したときは、イエスを知る者はほとんどいませんから、だれも振り向きもしない。ところがいまやイエスは大スターとなり、人がどんどん押し寄せてくる。そうしたら弟子たちはどうなるか。

昔、高峰秀子さんという女優がいました。たとえば九州で撮影だというと、他の俳優やスタッフは国鉄の一番安い席で行くとき、高峰さんだけは飛行機に乗って行く、そういう時代でした。その高峰さんが、ある方の紹介で付き人を雇った。最初はおとなしかったのに、高峰さんと一緒に行動するうちに、だんだん他の俳優さんたちに横柄な態度をとるようになり、高峰さんが大変困ったそうです。

弟子たちもまさにこれと同じで、自分の主人が有名になると、勘違いして自分も偉くなった気になり、だんだん高慢になっていくのです。今は小さくてまだ目立たないかも知れません。でもイエスは、「パン種に気をつけなさい」と言って、今は小さくてもやがて大変なことになると言って、あらかじめ警告します。

2) 内から外へ

でもこういうときは普通、「高慢になってはいけません」と言うはずですが、それが、「偽善には気をつけなさい」です。どうしてだろうと腑に落ちないまましていると、2節にはこうある。「おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。」

前回、外側と内側の話をしましたが、ここもそうです。内側に隠しているものは、いつまでも隠し通せるものではない。やがて必ず外側に知られていくのだと言うのです。それと偽善に気をつけることとどんな関係があるのでしょうか。

2 神の御前で

1) 恐れなければならない方

いやそれより、2節を読んで不安になる方もいるでしょう。「隠していたあのことこのことを知られたらどうしよう。」知られて欲しくないのは、家族であったり、会社の上司であったり、警察であったりいろいろです。極端な場合は、自分が隠してきたことが世間に明るみに出たら、殺されるかも知れない。世の中にはそういう方もおられるそうです。

ところがイエスはこう言う。4,5節。「わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を

持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

これを言い直すところなる。「たとえあなたが殺されたとしても、そんなことは心配しなくてよい。むしろその後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っている父なる神のことを恐れなさい。」

ゲヘナがどんなところであるかについては、聖書には火の燃えさかるところとしか書いておらず、詳しいことはわかりません。永遠のさばきを受けるところ、いのちの書から消されるところ、そのように考えておいて間違いありません。

2) 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます

ゲヘナに投げ込まれることについてはまた後で触れることにして、その前に10節のみことばを考えておきます。「人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。」

このみことばには、良いニュースと悪いニュース、二つのニュースがあります。まずグッドニュースから。「人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。」「人の子」とはイエス・キリストです。もしかして自分は、イエスの悪口を言っていたかもしれないとおもっていた方、そんな方は安心してよい。

次にバッドニュース。最初にも触れたように、イエスを信じたとしても、赦してもらえない罪があるらしい。聖霊を冒瀆するとはどういうことなのか。まだ答えに到達していません。

3 主イエスの教え

1) 「偽善に気をつけなさい」

人々がイエスの所に押し寄せてくるのを見ていた弟子たちがじょじょに高慢になっていくとき、イエスは「偽善には気をつけなさい」と言いました。どうしてか。皆さん「不安になるな」と言われて、不安を抑えられますか。そんなことができる人はいません。それと同じで、高慢になるなど言われて、すぐに高慢を直せるなら誰も苦労しない。イエスはそのことをご存じですから、「高慢になるな」とは言わないのです。

2) 聖霊が働くとき

その代わりに「偽善に気をつけなさい」と言う。これはどういうことか。先ほど、イエスが弟子たちに、「来る途中、何を論じ合っていたのですか」と尋ねたとき、弟子たちは黙ってしまった、と言いました。なぜ黙ったのか。イエスに知

られたくないからですね。どうして知られたくないのでしょうか。だれが一番偉いかというような議論をすることが、悪いことだと気がついているから。罪の意識があるので沈黙した。同じようなことは皆さんも経験があるはずです。

どうして罪の意識をもつのでしょうか。考えてみれば不思議です。世の人たちは、人には良心が備わっているからと言います。そのとおりです。しかし、その良心を与えてくださったのはだれか。神です。では、良心があるから自動的にみな心が痛むのかというそうではない。良心は何が正しいのかが書かれたノートだと思ってください。ノートを読み上げる人がいて初めて、心が反応するようになっている。その読み上げる働きをするのが聖霊、そのように考えるとわかりやすい。

3) 二つの反応

何が正しいのか聖霊が読み上げる声を聞いて、私たちはどう反応するか。二つの選択肢があります。一つは、聖霊が教えてくださるのを打ち消して、自分は正しいと言い張って軌道修正をしようとしな。もう一つはその反対で、自分は間違っていたことをしていたと告白し、悔い改める。そのどちらかを選ぶことになる。

どちらが救われるかは明かです。悔い改めた人が救われる。でも、せっかく聖霊が教えてくださり、神の方からせっかく救いの扉を開いてくださったのに、いつまでも自分が正しいと言い張っていたらどうなるか。自分の手で救いの扉を閉めてしまう。そうやって赦されるチャンスを失ってしまう。これが聖霊を冒瀆するということです。赦されない罪があるわけではありません。すべて赦される。ただし、自らの手でせっかくの赦される道を閉ざしてしまったら赦されるチャンスはない、そのような意味です。

いま、聖霊が働かれるとき、私たちには二つの選択肢があると言いました。偽善者はどちらでしょうか。内側に罪あることに気がつきながら、絶対に認めない人の方です。その人たちは赦されるチャンスを自ら捨てている。だからイエスは言うのです。「偽善に気をつけなさい。」

4) 聖霊を与えてくださる方

聖霊の働きによって私たちは、内側にある罪に気がつかせていただき、それを神の前に告白して外に出します。そうしている限り、私たちは絶対に偽善者となることはありません。むしろ、神の義

をいただくことになります。その時何が起ころのでしょう。

「からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

たとえ私たちが死んでからだが減びたとしても、まったく恐れることはないといエスは言っています。死ぬことを私たちは恐れていますから、非常に喜ぶべきことでしょう。しかし、神が私たちがゲヘナに投げ込むかもしれない。そこにどうしてもひっかかる。これも大丈夫です。

父なる神は、私たちになにをしてくださっていたか。11章13節。「それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

父なる神は、私たちがゲヘナに投げ込みたくないのです。投げ込みたくないから、聖霊を与えてくださり、罪を外に告白して救われるように促してくださる。

自分が罪の告白をしたところで世の中はなにも変わらない、と思うかもしれませんが。でも15章7節にこうあります。「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」

これだけの喜びが天にあるというのなら、この罪の世界に救いのともしびが灯されていくことで、天の御国がつくられていくことではないですか。この世界が変えられていく。それほどの影響を与えることができる。神の救いのみわざは私たちの思いをはるかに超えて、多くの力がある。そのことを思い、御名をあがめたいと願います。